



作品を前に、林屋晴三氏(右)と西中千人氏。

## 西中千人ガラス展 呼継 よびつぎ

【会期】 5月29日(水)～6月4日(火)  
【会場】 横浜高島屋7階美術画廊  
横浜市西区南幸1-6-31  
tel. 045-311-5111

【会期】 6月12日(水)～6月25日(火)  
【会場】 日本橋高島屋6階美術工芸サロン  
中央区日本橋2-4-1  
tel. 03-3211-4111

「受け継がれる日本の美意識を礎に百年先の伝統となるべき作品を創る」ことをテーマに、従来のうつわの枠を超えた「ガラスの呼継」を手がけるガラス作家・西中千人。割れるガラスの儚さと力強さに、呼継の精神を吹きこむ。このたび、個展を前に、「呼継」の新たな展開について、これまで作品を見てきた林屋晴三氏を迎え、対談していただいた。

### はやしや・せいぞう

1928年京都府生まれ。48年より国立博物館員(現東京国立博物館)、90年同博物館退官。現在、東京国立博物館名誉館員、道川美術館理事長、菊池寛実記念 哲美術館館長、楽美術館理事、東洋陶磁学会常任委員、五島美術館、島山記念館、三井記念美術館等の評議員も務める。

### にしなか・ゆきと

1964年和歌山県生まれ。88年産業科大学薬学部卒。進米し、カリフォルニア芸大で彫刻とガラスアートを学ぶ。海外のアートフェア(NY、ロンドンなど)や日本国内の画廊で個展開催。国内のみならずスペイン、北欧の美術館・大学に作品收藏、受賞多数。



「呼継」 H34×W18×D17cm



「呼継」 H13.5×W30.5×D29.5cm

自分たちの文化的な背景や、アイデンティティをしっかりと持っている。これはアメリカだけでも、私はこういう文化の上でこういう素材を触るんだと。ニューヨークの展覧会に参加しよう、はい、何持っていくますかと言われたときに、最初は色をたくさん使って、色々ガラスの呼継を出したんです。本当はお茶碗の金継みみたいなものをガラスで出したかった。ただ、怖かったですね。向こうの連中がわかるのかというのが自信がなかった。でも割れるとか欠けるとか壊すとか、ガラスで一番してはいけないことでも、きつちりと隙間を見せるというものを出していけば伝わるなと思ったんです。そこから、段々と、これは色がなくていいけるんじゃないかと思いはじめまして。先生がおっしゃる通りに、いっぱい入れればいってもしゃないんだよと。

林屋 いろいろなことをやって、当然ここへ来るはずなんです。今回の作品は、透明の継ぎ目が面白く生きている。これまでのガラスになかった世界ですね。しかも、自由だから面白いですよ。失敗がないんだから(笑)。

ガラスとしては邪道だと言う人がいると思いますよ。しかし、魅力があればいいんだから。邪道もクソもないんですよ、芸術は。ピカソなんかも邪道もいいとこだったかもしれない。しかし魅力があるから、引き寄せられる。

西中 本来は割れているかのように見

えるだけでも駄目だったんです。ガラスなんかとくに、ひびが入っているように見えるだけで、もう……。

林屋 やきものだってそうですよ。

西中 それをあえて割ってしまう。

林屋 やきものでここまでやる人はいない。ガラスだから、これができるんだね。西中さんが呼継と名付けたものをやることによって、可能性を広げた。これはそのうちにみんな真似するようになるよ。飛ぶように売れば(笑)。

この作品(95頁)は、品がいい。どこがいいのかというと、金が入ってないことだね。金というのは、使ってもいい。使わないもいい。そこはわかまえないと。気泡があってもいいといううつわをつくれればいいじゃないですか。気泡があるのは、ガラスの習性だから青磁の釉薬だって、細かい気泡があるんですから。それを淘汰して、本当の素晴らしい青磁色のうつわをつくれたのが北宋時代末期。ガラスの質もいろいろと工夫があるだろうし、材料も無限にありますよ。泡をもっと味方に入れて、金加わらないガラスの呼継、西中呼継の世界をもっと深めたい。

西中 なんで金を入れようとするのかという、やはりちよつとした自信のなさを金が入ることによってごまかせるんじゃないかと思ってしまうんです。林屋 金というものは、ものすごく面白いんです。だけど、最後に使わなきゃいかん。

西中 金はなくていいんですよ。そ

林屋 (作品を見ながら) ここまで来たというのは、ものすごく嬉しいね。

西中 ありがとうございます。呼継を始めたのは、何年前か、海外の展覧会に参加させていただくことが増えたということがきっかけだったんです。アメリカでガラスの勉強をさせてもらったんですけど、吹きガラスはイタリア系の先生、カットはチェコ人で、彫刻の先生はイギリス人でした。彼らは





【呼継】 H15×W40×D38cm

の隙間が見せたいんだから。  
 林屋 透明のガラスのあいだがあったりすると、素通しじゃなくて、色ガラスで入れられるでしょう。  
 西中 入ります。  
 林屋 そこは面白い。だから、無限ですよ。しかしいちばん大事なことはあなたの心が自由であること。こうでなきゃならんということはないんだから。いつもいつも挑む心。大地の中で生きることね。自然にあなたの手本が全部あると思う。海を見ていけば、これをどうガラスで表現してみようかと。無限にあるわけです。  
 西中 一昨年ケニアに行きました時に、サバンナから気球に乗って日の出を見るというツアーに参加したんです。朝3時か4時で、まだ薄暗い。草原をシマウマとかキリンとかが走っているそばを気球に乗って上がったら太陽が出てきました。46億年、毎日こうなんです。それがある時、50年そこら人間をやっている私がひょっこり見るわけです。46億年というのは何なんだろうって考えました。人間の文化とかじゃない、単細胞生物から何から全部、ここなんです。それが、人間の文化と呼んではいいの、サルみたいな時から絵を描き始めて、その延長が今なんです。今までそういうことに気づくことがなかったんです。いまだ地に生きろとおっしゃられましたけれども、都市生活をしていると、気づかないんです。

林屋 天と地のあいだに生きているんだから、全部摂取すればいいんだ。  
 西中 そうですよ。綺麗な花でも、花屋で売っている花としか思わなかったですけど、十年前に千葉の田舎に引っ越しまして、自然の花を識りました。林屋 やっぱ花屋の花は生きてない。私がお茶会をやる時、松原さんという作家が那須の山から花を切って持ってくる。その花が実に生き生きしている。面白いなと思います。昔から茶花は自分で切つてこいというんですよ。だから、いい茶花はかなり広い茶花畑を持つてないと、本当はできない。我々はその空間はないから、「花長」に行つて選んでいるけど、どこか隙間ができる。いいと思つても、やっぱ自然にあるものは違う。だから、あなたのお手本、つまり先生は自然ですよ。自然相手にやつていたら、誰もかわらないから。最後は何もないものになつてしまふかもしれない。透明で呼継の線だけになつてしまふかも(笑)。  
 西中 隙間だけとか(笑)。隙間を見せるためにどう組むかということでしょうか。  
 林屋 それも面白いな。しかしこだわっちゃいけない。  
 見ていると、作品によっては、みんな色がはっきり分かるんだね。  
 西中 隙間も見えますね。  
 林屋 これ(上掲作品)は見えない。  
 西中 金を使い過ぎなのかもわからないですね。これでもかというほど金を



【呼継】 H32.0×W20.5×D19.5cm

のせちやつているかもしれません。  
 林屋 怖いですよ、金は。いいものだから、どうしてもね。  
 西中 そうなんです。  
 林屋 結局、金で殺しているわね。  
 西中 これだけ透ければ見えるものが見えなくなつちやつてますものね。  
 林屋 いや、知恵が足りないだけで(笑)。金におんぶに抱っこになつてますね。  
 西中 そう言われますと身も蓋もない。林屋 身も蓋もないことなんです。人間のやつていることなんて(笑)。妙に身をつけたがるやつがいるわけ。それで世の中を甘くしている。それじゃ耐えられない弱さをもっているのね。現代人は。だから、甘くなる。よく見せたり、よく見ようとしたらね。厳しいものがなくなつていく。だから、西中さんは厳しく自分の呼継を追求していけば、誰もかなわないですよ。真似する人は出てきますよ。お前さんより上が出てきたとき、どうするか。それはやっぱり真実一路で生きるしかない。そのときに天地、大地の生きているか生きてないか。  
 西中 そこで本質が問われるわけですね。いまから力いっぱい突つ走つておきます。常に突つ走つていきます。そして常に壊します。  
 (5月1日 菊池寛実記念智美術館にて)